

エレンさんの遺言

梶村道子(ベルリン・女の会)

昨年(2013年)の2月6日、エレン・ヴァン・デア・ブルーフさんが90歳で亡くなりました。それを知ったのは11月、あわててネット検索をしたところ、写真家のヤン・パニングさんのホームページに、大きく印象的な目で微笑むエレンさんの写真と訃報がありました。「200~400人ともいわれるオランダ人『慰安婦』の中でタブーを乗り越え名乗り出て、議論を広めた数少ない一人でした」と、パニングさんは書いています。



1993年ベルリンで話すエレンさん
(提供: シンポジウム準備委員会)

エレン・ヴァン・デア・ブルーフさんは、日本軍の軍政下にあった蘭領東インド(現インドネシア)で1944年に、日本軍がオランダ民間人抑留所から女性を連行して慰安所での売春を強制した、いわゆるスマラン事件の被害者の一人でした。女性たちは、日本軍政下の抑留所という自由を剥奪された状況下で、日本軍将校に選抜され、慰安所に連行され、全く読めない日本語の書類への署名(「自由意志で売春を申し出た」という承諾書)を強要されました。まさしく、安倍首相らが否定し続ける「狭義の強制」でした。女性たちは毎晩日本人将校や民間人から強かんされ、日曜日には兵士用の売春宿に連行されて一日中強かんされました。日本軍によるこの組織的暴力は、戦後オランダ軍バタビア臨時軍法会議で裁かれ、1948年に日本軍軍人・軍属11人に死刑を含む判決が言い渡されています。

すぐれた活動家

1992年12月、同じくスマラン事件の被害者であるジャン・ラフ＝オハーンさんが東京の公聴会で証言したことを知ると、エレンさんもすぐに名乗り出て、報道機関のインタビューに応じています。それ以降、高齢で活動ができなくなるまで日本政府の法的責任を求め続けたエレンさんは、名乗り出た当初からすぐれた活動家でもありました。そのことを知らされたのは1993年の9月、ベルリンの女の会が在独韓国女性グループとドイツ人女性有志と共催した「人間の尊厳-女性の尊厳 戦争と強かん」というシンポジウムの場でした。韓国、北朝鮮、フィリピンからの被害者と並んでオランダから招待したエレンさんにも、私たちは被害の証言を期待していました。ところが演壇に立ったエレンさんは、「被害事実は他の人と同じです。私は日本政府への要求について話します」と切り出し、日本政府は事実を認めて謝罪したのだから、その証として補償をすべきだと言明したのです。エレンさんの発言は、ちょうど1ヵ月前の8月4日に出た河野談話を受けたもので、同談話が外交上、当時日本で受け止められていた以上に重い意味を持つのだということを、私はこの時教えられました。河野談話については、ドイツ紙も8月5日付けで

エレンさんから筆者宛の手紙(1997年)。「3年間デモを続け、日本へも3回も行ったのに、私たちは「居ない」も同然。結果がどうであれ日本政府は何か言うべきです」「国民基金」にノーと言った韓国大統領の姿勢に私は感嘆しています」と書かれています。

*"Ich wünsche...
Gerät am meisten. Wie die sagen:
"Nach 3 Jahren von demonstrativen
Forderungen sind wir noch immer
jeder Monat sind wir noch immer
3 Jahre reiten, sind wir noch immer
"No where. Was immer die Regierung
hat wäre, die japanische Regierung
muss doch endlich etwas sagen!
Ich bewundere die Haltung des Pres.
von Südkorea um mehr zu
sagen gegen die Zahlung der
"Asiatische Frauen Forum" ist dein
P. - wieder gesund & ich*

一斉に「日本政府が女性を奴隷状態に置いたことを認めた」、「日本が謝罪」と報じていました。それを今になって見直すなどという議論が通用するのは日本の中だけです。

女性のためのアジア平和国民基金を拒否

後にオランダの被害者が、「女性のためのアジア平和国民基金」(「国民基金」)の生活改善事業の対象となり、79人が支払いを受ける中で、エレンさんは公的補償を求める姿勢を貫き、基金からの受け取りを拒否し通しました。「国民基金」を巡って、日本政府はオランダ対日道義補償請求財団の懐柔を図ったとみえ、1996年9月に政府が同団体関係者を日本に招待した旅行について、エレンさんは筆者にこう書いてきました。「日本政府はお金と労力を使って私たちを綿で包もうとしたけれど、私の不信感是不変わる。私たちは、『国民基金』からの慰労金は要らないとはっきり言いましたよ。宿泊は第1級のホテル、英語とオランダ語はもちろん、インドネシア語のできるエスコートまで付けての接待だったと。エレンさんの苦笑が目に見えるようでした。

正義の実現を求めて

2007年11月、欧州議会の「慰安婦」決議を引き出したアムネスティ・インターナショナルのキャンペーンで、エレンさんはフィリピンのメネン・カスティロさん、韓国の吉元玉^{キムウォク}さんと共に欧州の主な議会を訪問し、各地を証言して回りました。エレンさんにとっておそらく公の場での最後の大きな活動でした。「私は60年以上も待ったのです。正義は実現されねばなりません」、これがベルリンの集会でのエレンさんのメッセージでした。

オランダのインドネシア帰還者連合「モンスーン」はエレンさんを追悼するサイトで書いています。「行動を起こすときは、どんなに自分の中の不安と闘ったことか、周囲からの反発をどんなに恐れたことか、と彼女は話してくれました。『やるのか、それとも、やらないか、そのどちらかでした。その中間なんてなかったのです』と」。